

茜色の歌姫



序章——紫の野

668

天皇の蒲生野に遊獵（みかり）したまう時、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野（しめの）行き

野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答えませる御歌

むらさきのおえる妹を 憎くあらば

人妻ゆえにわれ恋いめやも

〔万葉集〕卷二

飛鳥の北、広大な湖のほとりに新たに都が建てられて一年がたっていた。安曇の漁人の小舟の行き交うその湖は淡海と呼ばれる。その名にちなみ、新たな都は近江京（おうみきやう）と名付けられ、急ごしらえの宮や官衙（かんが）が、生木の匂いも濃く、屋を連ねていた。

——今日の御狩りは、近江に都を遷されてより、一年の祝賀。

淡海の東のほとり、蒲生の野には、周囲にしめ縄が張りめぐされ、数百の兵が守る中、王族百官は、半ば強いられて美々しく着飾り、男どもは勢子の追いたてる獣に矢を射かけ、女どもは楽器をかきならし、うらかな春の野のにぎやかさを盛り上げていた。

朝より始まった御狩は、多くの獲物を仕留め、膳部の伴部どもが皮を剥、塩をかけ、火で炙つて昼餉に供していた。

天蓋のついた椅子に座しているのは、天皇。かつては中大兄皇子との御名にて、大王と呼ばれる御位に即いてより、その呼称を天皇と改めた。齢四十八。このごろは病がちで、目尻が黒ずみ、頬はこけていたが、久方ぶりの御狩に、朗らかな様子。

その隣に坐すは倭媛皇后。齢二十四。逆賊として討たれた古人皇子の娘。ふつくらとした白い頬に、優しげな眼差し。

その周囲を大官どもが集い、笑いさざめいて語り合うを聞けば、百済の言葉が飛び交っている。過ぐる六年前、その頃は大和と呼ばれていた国は、三韓の百済を救うためとて、三万の軍に海を渡らせ、唐と新羅の軍に敗れた。滅んだ百済の王族や臣民、将兵が、数多く渡来した。その多くが近江に住み、都が建てられた。近頃は、大和の地で生まれ育った大官どもまでが、百済言葉で話す。

皇族の人々は、おの野を逍遙し、酒を酌み交わし、花を摘む女どもに語りかけている。なかでもひととき華やかなのは、天皇の長子、大友皇子。齢二十一。涼やかな容貌に、ひととき綺羅を尽くした装い。やがて天皇を継ぐべき一人として、多くの官が群がっていた。



蒲生野（滋賀県安土町）

天下を統べるは天皇。天皇をもつとも支えているのは、唐人すら褒め称えた詩の名人であり、武芸にも優れる大友皇子。人々はそう、囁き合っていた。

この二十余年……。

多くの事どもが起こった。

王族や大官が争い、諍い、互いに夥しい血を流し、はては、軍を三韓の地に興した。だが、中大兄皇子が天皇の御位に即きたもうて後、天下は平穩に鎮まっている。皇徳のありがたさよ。暖かな春の日差しを浴びつつ、そう言う者があれば、別の者が異を唱えた。

否、否。今はこそ、無事、鎮まっているが、乱れの元が尽きたわけではない。今の御世が代替わりすべき時こそ、新たな軍とならぬとも限るまい。

そう言い、眼差しを向けた先に、いまだ葉も青い紅葉の幹に、独り佇む人影があつた。

大海人皇子……。

一時は、中大兄皇子と高御座を争い、軍を興すも戦わずして屈し、妻を奪われ、娘をも大友皇子に妃として献じざるを得なかつた皇子。

その恨み、決して表には出したまわぬが、忘れたとは思えまい。

いずれは……。

続けようとして、皆、口を噤（つぶ）んだ。

彼等の傍らを、勾玉（が触れ合う涼やかな音色が過ぎた。艶やかな茜色の衣に、薄紅色の裳。豊かな黒髪を結び、首に勾玉を提げ、韓渡りの黄金の耳環。

三十六の齢を重ねつつ、その容色に衰えは見られない。

額田郎女。

人々の耳に、かつて、三韓に向かう軍船が海を埋め尽くすなか、高らかに歌い上げた額田郎女の声が蘇った。

熟田津に

船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ

今は漕ぎ出でな

生まれは詳かならぬが、その美しさを大海人皇子に愛でられ、その歌の才を大王に認められ、宮中に重きを置いていた。今は、公の場に姿を現すことは減ったが、大友皇子の妃、十市皇女の母として、敬われている。

美し歌人よ……。

歩みすぎていった額田郎女の後姿を見詰めつつ、人々は囁きあつた。

奪われた恨み、大海人皇子は決して忘れまい。

ふと、額田郎女が足を止め、紅葉の幹に寄り掛かる大海人皇子に軽く拝礼したとき、またも人々は貌を見合わせ、耳打ちしあつた。

……何を言い交わすのか。

拝礼を終え貌を上げた郎女の眼差しが、一瞬、大海人皇子の眼差しと交わったその時、しかし郎女は、すぐさま歩き始め、耳環と衣擦れの音を残して去った。大海人皇子は、佇んだまま、面差しも変えず、唇すら動かさなかった。

やはり、天皇の御狩りの場ゆえ、人の眼を憚りたもうたか……。

否、否。かつては睦み合い、子もなした仲。言葉は交わさずとも、眼で語り合えるはず。

いまだ、互いに執心ということか？

人の妻ゆえに、いと欲しいということもあるう。

囁き合う人々に一瞥もせず、大海人皇子は眼差しを伏せたままであった。その唇がかすかに動いたのを、誰も気づかなかつた。

巫那……。

額田郎女の見せたあの眼差し、切なげに訴えるその眼差しに、この二十年余、脳裡を離れぬあの声が、また蘇っていた。

——吾を助けて。